

# 浦賀文化

平成31年(2019年)4月1日

第57号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

## 浦賀城

東浦賀の叶神社がある明神山一帯は、県内でも有数の鎮守の森として、県の自然林指定を受けています。この明神山は戦国時代から江戸時代にかけて、たびたび歴史の舞台となりました。



対岸より東叶神社、明神山を望む

浦賀にもお城があった、という不思議な感じがします。いったいどこに？誰が？何のために？と考える方も多いのではないのでしょうか。そこで、今回は、浦賀城についてお話ししたいと思います。

「お城」といえば、小田原城や大坂城のように天守閣をもち、高くそびえたつ建物を想像します。こうした構造をもったお城は、比較的新しい時代になってから築かれるようになりました。新しいとはいえ、今から四五〇年も前の戦国時代のことですから新しいとはいえないのかも知れませんが…。

もともとお城というのは、山そのもののもつ自然の地形と、その周りを流れる川をお堀とし

て利用した砦のことを指して使いました。それは、柵と呼ばれることもあり、古代から戦国時代にかけて築かれたお城は、その多くが山城と呼ばれる形をとっていました。横須賀市内にも、衣笠城や佐原城、太田和城などの山城がありました。平安時代にはその存在が確認されており、現在もその面影を偲ぶことができます。



さて、今回のテーマ「浦賀城」について見て行きましょう。

小高い自然林の丘に東叶神社があります。社務所の奥に咸臨丸での太平洋横断を前にして勝海舟が航海の無事を祈り断食をしたといわれる場所があります。

さらに、社殿の背後に築かれた二百五十段ほどの階段を頂上まで登り切ると、目の前に浦賀湾、その向こうに房総半島を見渡すことができるひらけた場所に出ます。この平らな所に「浦賀城」の本丸がありました。このあたりの丘(明神山)を含む一帯を「浦賀城」と呼びます。

城を築いたのは、一五世紀後半の戦国時代に、小田原を本拠地として関東地方を治めた北条氏三代目当主・氏康の時代でし

た。ちなみに、この北条氏というのは、元来は伊勢氏を名乗っていた。しかし、鎌倉時代に執権(将軍の補佐役)として幕府の実権を掌握していた北条氏と区別して「後北条氏」と呼ぶこともあります。

室町幕府が衰退し、全国に戦国大名が現れ、日本中が混乱の時代を迎えます。それとともに北条氏の祖である北条早雲こと伊勢盛時の食指が関東一円にまで及ぶようになると、三浦半島にもその影響が現れてきます。油壺に近い新井城を拠点に立てこもっていた三浦道寸義同の一族も、北条氏の度重なる攻撃に力尽き、永正一三年(一五一六年)七月、ついに陥落し、三浦半島全域が北条氏の支配下におかれます。

一方、一六世紀後半になると南房総で勢力を張っていた里見氏は、領土拡大のため、水軍の基地となる良港を求めて鎌倉や三崎に軍船を送り込み、幾度となく三浦半島を攻めてきました。

たびたび北条領を襲う里見氏の動向を監視し、いざという時に備え、軍船を繋いでおくために設けられたのが「浦賀城」でした。しかし、浦賀城が実際に築城された時期についての記録はなく、弘治三年(一五五七年)頃ではないかといわれています。永祿六年(一五六三年)には、四代目当主・氏政が率いる一万

騎もの北条軍が里見氏の和田城(富津)を攻撃するために、浦賀の港を出発したといわれています。この北条軍を率いていたのは、「浦賀定海賊」と呼ばれ、北条氏から漁船頭という肩書を授かった東浦賀の漁師を中心とした人たちでした。

北条氏と里見氏との度重なる合戦は、両氏の和睦が成立した天正五年(一五七七年)まで続きました。

このように一五世紀半ばから一六世紀にかけて全国に吹き荒れた群雄割拠の混乱も、一六世紀の後半から織田信長、豊臣秀吉の登場により天下統一事業の完成期を迎えました。その結果、早雲から氏直まで、五代に渡り関東一円に栄華を誇っていた北条氏も、天正十八年(一五九〇年)のいわゆる小田原攻めにより時代の幕を閉じました。

浦賀の燈明崎では、北条・里見両氏の合戦で犠牲になった人々のものとされる多数の遺骨が発見されたといわれています。その記録は、燈明崎にある供養塔のひとつである「千代岬瘞骨志の碑」に刻まれています。(芳賀久雄)

### ★参考文献

- ・新横須賀市史(通史編) 中世 横須賀市
- ・横須賀むかし話 堀越英男



# 歴史 語り座 浦賀奉行所編 その七

郷土史家 山本 詔一



## ●浦賀奉行所の警備船●

弘化三年（一八四六年）閏五月二七日、アメリカ東インド艦隊司令官ジェームス・ビッドルに率いられた二隻の軍艦が浦賀沖に來航した。この驚異は、それまでの異国船の概念をすべて覆すほど大きなものであった。それは、江戸幕府が、ビッドル艦隊が帰航するとすぐに江戸湾周辺の海防状況の視察を海防掛目付の松平近韶に命じていることから窺える。

備されていた警備船の記録は少ないので、全容を知ることが出来るこの記録は、大変貴重なものである。

### 【下田丸】

長さ五丈八尺（約17・5 m）  
幅 一丈三尺一寸五分（約4 m）  
深さ四尺六寸（約1・4 m）  
三二挺櫓（32人で漕ぐ）

### 【長津呂丸】

長さ五丈三尺五寸（16・2 m）  
幅 一丈二尺（約3・6 m）  
深さ四尺五寸五分（1・37 m）  
三〇挺櫓

### 【日吉丸】

長さ五丈（約15 m）  
幅 一丈一尺六寸（約3・5 m）  
深さ四尺二寸五分（1・28 m）  
二八挺櫓

### 【千里丸】

長さ四丈一尺五寸（約12・5 m）  
幅 九尺三寸五分（約2・8 m）  
深さ三尺一寸（0・94 m）  
一六挺櫓

浦賀奉行所の役人たちは、船を漕ぐことが出来ることは必須条件とされていた。しかし、実際に配

この四艘の警備船の他に、押送船として小嵐丸、明星丸、細矢丸、白駒丸、飛燕丸、小緑丸の六艘があった。さらに、三崎の

役宅（出張所）に八十嶋丸が配備されていた。押送船は八挺櫓で、本来は鮮魚を江戸へ運ぶために使用されていた船であったが、波切りのいい高速艇であったので、浦賀奉行所でも警備船として配備されていた。後に黒船に乗ってやってくるペリー提督も、自国のカッターよりも押送船の性能の方が良いと褒めている。

そして、これらの船を実際に動かす役についている村は、野比、佐原、久里浜、森崎、八幡、長沢、内川新田、鴨居、走水、大津、公郷、深田、逸見、田浦、長浦、横須賀、浦郷の一七ヶ村であった。これより、現在の横須賀市の東京湾側の海岸線にある村は、すべて奉行所の手伝いに登録されていたことがわかる。

## （俳句の散歩道）

その昔ここに番屋やアロエ咲く  
田島 耕史

初風や扇開きに浦賀湾  
雅楽川弘志

## 笑話一題

私が忘れられない船は日本丸です。幼い頃、浦賀には地味な色の船が沢山行き来していました。造船所は養生に覆われて、見上げればせわしなくクレーンが動いている、鈍い鉛色に見えた浦賀の風景と地味な色の船はとも気味が悪く、好きになれませんでした。

でも、日本丸は違ったのです。私が見上げたその日の浦賀には、青空にキラキラ輝き、船体は白く、マストの帆は風にはためき、船首には美しい藍青（女神像）、歓声と色とりどりの紙テープが舞う中、浦賀から海に出ていく二代目日本丸の姿がありました。とても華やかで、まるで外国のお祭りのような風景です。

日本丸の白く美しい船体は、ほぼ木できています。通常の船とは違い、腕のよい造船所でした。設計から製作まで全て日本国内でおこなわれた初の大規模な船でした。群青の海に絵画のごとく、藍青に導かれ、白い船体が浦賀から東京湾へ…。私はすっかり見惚れてしまい、見えなくなるまで見送りました。色々な船を見る機会がありました。みんなに美しい船は未だに見たことがありません。

浦賀といえば黒船という人が大半でしょうが、私にとって浦賀は白い日本丸のイメージなのです。（ゆきちゃん）

